日本の都市下層社会

津田 真澂 著

ミネルヴァ書房

日本の都市下層社会

津田 真激 著

ミネルヴァ書房

はしがき

本書は日本の都市下層社会についての著者の歴史的構造的研究をまとめたものである。本書の構成は次のとおりである。第一編は視点を明治末期におきながら、明治初期以降の日本の大都市における工業発展と大都市の下層社会がどのような内面的関連で結ばれているかについて分析したものである。第一章では、大都市の代表例としての東京市の工業発展の歴史的様相を、第一節では明治初期から明治三〇年代について検討し、第二節では歴史的発展の一つの画期としての明治末期の工業発展の状態について構造的に検討した。従来までのこの種の研究が主として工場制工業の史的発展を関心事としたことにくらべて、この二つの節では大都市における零細産業にまで分析の手をのばし、大都市工業の業種別類型構成をこころみたことは本書の特色の一つといえようか。このこころみは本書にとっては第三節において明治初年から末期に至るまでの、いわゆる「貧民窟」の歴史的発展の検討をするさいに、ぜひとも必要だったのである。

第二章では明治四四年から大正元年にかけて二回にわたっておこなわれた、わが国で最初の本格的社会統計調査というべき「細民戸別調査」の分析をおこなった。この調査は大正一〇年の調査とあわせて慶応書房から昭和四六年に『細民統計調査』として復刻された。この復刻版には著者の解説がつけられている。この「細民戸別調査」を分析する意義は大きくいって二つある。第一には、いわゆる「貧困化」問題の視点から明治末期の都市下層社会を構造的に分析するということにある。都市下層社会についてこのような構造的分析を可能にするのは、この「細民戸別調査」が提供する材料が日本では年代的に初めてのものだからである。第二には、いわゆる「工

業化」の視角からみた場合、この「細民戸別調査」はきわめて重要な位置をもっている。すなわち、この時期の、いわゆる「貧民窟」は大正一〇年の「細民調査」が示す結果とは質的に相違しているのである。それは、大正一〇年の「細民調査」では住民の職業としては、露店商、紙屑拾いなどいわば近代工業社会における典型的な窮民的職業が中心を占めるのにくらべて、明治末期の「細民戸別調査」では工業労働従事者が占める比率が高いのであって、大都市における工業発展のプロセスの中に「貧民窟」が直接にくみこまれ、工業労働の提供体としての位置をはっきりあらわしているのである。このことは日本の工業貧労働の供給源が農村の出稼型労働にあるとされた仮説を一つの面で破るものであって、機械制工場貧労働ではなく、都市の小規模零細工業までをふくめた貧労働を考えるとすれば、大都市の都市下層社会に堆積された貧労働を無視することはできない。しかも機械制工場は日本の産業構成としては、いわば富士山の頂きであって、裾野まで広がるところの下請中小、零細企業、自営業などが頂点の機械制大工場の親企業の存立を可能にしているという特質を考慮するならば、このような大都市下層社会の工業貧労働を無視することはできないはずである。第二章はこのような視角から、第一節では第一章第三節を受けて明治初期から三〇年代までの、いわゆる「貧民窟」の職業および生活水準を歴史的に概説した上で、「細民戸別調査」の分析に入り、第二節では出発点として所帯構成、住居をしらべておき、第三節で職業および収入水準を綿密に検討した。また第四節では大都市への流入、定着の事情、貧困におちいった理由について検討をこころみた。これらの分析結果にもとづいて、第三章では、まず生活水準の面から大都市工場労働者などとの比較をおこなった。その比較も、第一節では明治三〇年代について、第二節では第二章の分析結果について、というように歴史的比較をも考慮した。その結論は該当個所についてみればわかるように、工場労働者等と「貧民窟」住民の間には生活水準でほとんど質的差がない、ということである。このことは本書が提示する一つの特

質であろう。

第四章では、労働市場の面から工業労働市場、とくに工場労働市場と「貧民窟」住民の労働力供給との関連を追求した。第一節ではその一般的関連を検討し、第二節では「貧民窟」住民の次の世代である、いわゆる「非現住者」の職業を検討し、それらの両者から、「貧民窟」労働市場と工業労働市場が密接な関係に立つものであることを立証した。

さて第二編では、第一編からえられた結果を基礎として、日本の社会構造を都市下層社会の側から、いわば下からみあげて検討し、理論化することをこころみた。著者は『年功的労使関係論』(昭和四三年)や『日本の労務管理』(昭和四五年)などで日本の社会構造においては学歴別身分別構成と年功制自律集団から成る階層構成が存在し、日本の労働組合もまた『アメリカ労働組合の構造』(昭和四二年)にみられるような階層的独自性をもたない性質のものであることを主張してきたが、その出発点は実は本書の研究からはじまったのである。

第一章では都市下層社会の社会的特徴である「貧困」についての社会的救済制度について歴史的に検討した。そして第一節および第二節を通じて、社会的救済制度は貧困化の理由が発生した時には、その救済によって階層没落を支えるものではなく、労働者は企業別救済をいったんはなれてしまうと、とめどなく最下層まで没落する性質をもったものであることを分析した。

第二章では、救済制度がこのようなメカニズムをもち、かつ第一節でさらに検討するように社会的救済制度が未発達の場合には、第二節で分析するように、貧困の分析が進んでも、それは現実の力となりえぬことを検討した。このような事情から、労働者階層の中では大企業労働者といえども、「下層社会」思想をぬけ出ることができなかったことを第三節で考察した。

第二編第三章は、このように第一編および第二編第一章、第二章をへてきた上での本書のいわば結びにあたる部分である。ここでは戦後に著者が参加した、いわゆる大都市貧困層の実態調査が報告されている。このうちの第二節は、実は、第一編の第五章にあたる部分なのであるが、全体の位置から考えて、ここに移したものである。この実態調査をおこなって以後、著者は工場労働の実態調査に関心を移したので、結びは実さいには未完結であり、今後の一層の研究にゆだねてある。

本書のような、まことに地味な研究を出版していただいたミネルヴァ書房杉田信夫社長に謝意を表したい。

昭和四十七年八月

津田真澂

目次

はしがき

第一編　日本の都市下層社会　――明治末期の賃労働――

第一章　明治時代における工業発展と下層社会　――東京市を中心として……三
第一節　明治初期―三〇年代の大都市工業の発展……三
第二節　明治末期の東京市工業の状態……一六
第三節　明治時代における東京市の下層社会……四二
第二章　明治末期の「細民戸別調査」の分析……五七
第一節　明治初期―三〇年代の「貧民窟」の職業および生活水準……五七
第二節　「細民戸別調査」における都市下層民の所帯構成および住居……七四
第三節　都市下層民の職業および収入水準……八三
第四節　出身地および貧困の理由……一〇二
第三章　工場労働者と都市下層社会の生活水準の比較……一二四
第一節　明治三〇年代における比較……一二四
第二節　明治末期―大正初期の比較……一三八

第四章　明治末―大正初期の都市下層社会の労働市場における意義……一九七
第一節　明治時代の労働市場の性格……一九七
第二節　「貧民窟」非現住者の労働市場における位置……二〇六

第二編　日本的「下層社会」論

第一章　大戦前の救済制度……二一三
第一節　共済組合の発達と社会保険……二一三
第二節　救貧法の未発達と慈善事業……二一四
第二章　労働者の「下層社会」思想の意義……二〇四
第一節　救貧の基調としての「隣保相扶」思想……二〇四
第二節　貧困の概念とその規定の歴史……二二三
第三節　労働者の「下層社会」思想の歴史的意義……二二四
第三章　日本的下層社会と国民階層理論……二二九
第一節　日本的社会階層の存在形態……二二九
第二節　国民諸階層論の構想……二二四
第三節　失対日雇実態調査……二二〇
あとがき

第一編
第一図　国民階層別消費別支出図（明治四三―大正元年）……二四〇
第二編
第一図　富山市階層別・消費水準別世帯分布面積図……二四〇
第二図　ブース、ロンドン調査による層別・生活級別所帯分布面積図……二四〇
第三図　国民階層別・画期別階層移動図……二五三
第四図　世代階層相関図……二七一

第一編
第一表　江戸の人口……四
第二表　東京市の人口……四
第三表　輸入移植産業業種別重要工場（明治二五年）……二
第四表　東京市輸入移植産業業種別重要工場（明治二四年）……三
第五表　東京市工業人口（明治三〇―三三年）……二四
第六表　東京市職業別人口（明治四〇年）……二六
第七表　東京市鉱工業、交通業労働者数（明治四〇年）……二七
第九表　東京市工業労働者出身地（府県別）（明治四〇年）……三
第一〇表　典型的独立者型産業……三六
第一一表　典型的男子労働者型産業……三六
第一二表　典型的男子労働者型（配偶有無、年令別）産業……三九
第一三表　典型的女子労働者型産業……三〇
第一四表　典型的女子労働者型（配偶有無、年令別）産業……三一
第一五表　典型的内職者型産業……三三
第一六表　典型的内職者型（配偶有無、年令別）産業……三三
第一七表　東京市工場規模別労働者数（明治四〇―四一年）……四一
第一八表　静岡県調査、人民生計費比較表……六六
第一九表　名護町貧民生計（明治二一年）……六七
第二〇表　名護町貧民生計（明治二三年）……六九
第二一表　東京市人力車夫生計（明治三〇年）……七一
第二二表　新網芸人生計（明治三〇年）……七一

≪著者紹介≫

津田真澂（つだまさとむ）

昭和27年　東京大学経済学部卒業
現　職　一橋大学社会学部教授　経済学博士

著　書　『労働問題と労務管理』（ミネルヴァ書房，昭和34年）
『労務管理』（ミネルヴァ書房，昭和40年）
『アメリカ労働組合の構造』（日本評論社，昭和42年）
『年功的労使関係論』（ミネルヴァ書房，昭和43年）
『労使関係の国際比較』（日本労働協会，昭和44年）
『日本の労務管理』（東京大学出版会，昭和45年）
『能力主義管理の開発』（労働法学出版，昭和46年）
『アメリカ労働運動史』（総合労働研究所，昭和47年）

日本の都市下層社会

昭和47年10月5日　第1版第1刷発行

定価 1,800円

著　者　津田真澂
発行者　杉田信夫
印刷者　船先悦収

発行所　株式会社 ミネルヴァ書房
京都市東山区山科日ノ岡堤谷町1
電　話　075（581）5191番（代表）
振替口座番号・京都8076番

© 津田真澂，1972

天理時報社・新生製本

3036-46601-8028